

[翻 訳]

コンラート・ツェルティスのジクストゥス・トゥヒャー宛書簡(1491/92年)

Translation: Letters of Konrad Celtis to Sixtus Tucher, 1491/92

田 中 圭 子

Tanaka Keiko

はじめに

本稿で訳出を試みるのは、ドイツ語圏出身のラテン語詩人、コンラート・ツェルティス(1459~1508)が、友人である法学者ジクストゥス・トゥヒャー(1459~1507)に宛てた私的書簡である。ふたりは人文主義への関心を共有するのみならず、バイエルン公が創設したインゴルシュタット大学で教鞭を執る同僚でもあった。彼らの間で交わされた書簡はすべてラテン語で書かれており、そのうち、1491年から1495年の間に送られた26通が、自筆書簡または写しによって現在まで伝来している¹。ここでは、ツェルティスがトゥヒャーに宛てた書簡の中から、1491/92年に書かれた2通を取り上げて紹介する。

ツェルティスは、インゴルシュタット大学で詩学と修辞学の授業を担当していたが、ラテン語書簡を作成できる能力を育成することは、修辞学教育における重要な目的と位置付けられていた。書簡の書き方を指南するマニュアル的な内容の書物も多くの作家によって書かれており、ツェルティスも1492年に書簡作成の手引を含む修辞学教本を刊行している²。また、ラテン語書簡の作成方法を熟知していたツェルティス自身の書簡は、書簡作成の理論と実際の書簡を比較するうえで、格好の実例であるといえる。

さらに、ツェルティスにとって書簡は、単なる情報伝達ツールであるにとどまらず、人文主義者たちの相互交流と知的創造活動を促進するための手段でもあった。ルネサンス期から啓蒙期にかけて、ヨーロッパの教養知識層の共同体は「学問の共和国」(respublica litteraria)と呼ばれたが³、その構成員を結び付けた主要なメディアのひとつが書簡であった。「学問の共和国」という呼称は、16世紀に広く用いられるようになったといわれるが、ツェルティスは、すでに1492年にインゴルシュタット大学での「開講演説」の中で、この言葉を用いている⁴。彼はまさに、書簡による人的ネットワークの構築を意識的に推進した、ドイツ語圏における先駆者と位置付けられる。

このように、書簡は、ツェルティスの文芸活動の中で無視しえない意義をもつものだが、改変や誤記が含まれる可能性のある写しではなく、自筆のオリジナルが残されている例は多くはない。その中で、トゥヒャー宛ての自筆書簡はある程度まとまった数(19通)が伝来しており、注目に値する。同じ町に住む友人同士であったツェルティスとトゥヒャーの間に交わされた書簡は、必ずしも手引書で説かれるような規範に則って作成され

たわけではなく、走り書きのメモ程度の短信も見受けられる。ここで取り上げる書簡のうち1通は、冒頭の「挨拶」はあれど、通常その後には置かれる、読む者の心をとらえるための「序言」は省かれ、すぐに「用件」の叙述となる（書簡20）。もう1通では、「挨拶」なしに、書簡のおよそ半分を占める「序言」が始まる。これに続いて述べられる主な「用件」は、大学でのツェルティスの待遇改善の要望であり、この件に関する助力を得られるようトゥヒャーの気持ちを導くための「序言」であると考えられる（書簡23）。また、2通とも発信地と日付の記載を欠いている。

ツェルティスが取り交わした往復書簡は、1934年に、ルップリヒの編纂によって公刊された⁵。本稿で用いている書簡番号は、この往復書簡集に基づくものである。それぞれの書簡が執筆された時期と場所については、ルップリヒの推定に従って示している。

翻 訳

書簡20

（インゴルシュタット、1491/92年 降誕祭頃）

コンラート・ツェルティスよりジクストゥス・トゥヒャーに、幸いがあらんことを。夜通しで書き物を、より本当のことを言うともまったくお恥ずかしいものなのですが、このところ行っておりました。言うなれば私の未来の仕事の序奏のようなものです⁶。私にとってもっとも親愛なる方、そして、いわば私のあらゆることに対する裁判官であり監察官であるあなたに今お送りします。もし、付け加えたり省いたりすべきところがあれば、あなたの助言と知恵が、私に気づかせてくれるでしょう。つまり私はあなたについてそのように考えましたので、もしあなたが、それを公表に値すると評価してくださるなら、自分によって分別なく軽率に仕上げられることはないと思います。そしていま、講座が静かになり、大学でのあらゆる議論がやんだなら、その時間に読んでいただけるでしょう。いつか時間を見つけられたら、私があなたのところを訪問しましょう。そうしたら、その原稿からある程度の部数を印刷業者に刷ってもらえます。お元気で、そして、聴衆が豎琴を弾く者よりも美しい調べを重んじるところで、どのように豎琴が演奏されるかと同じような具合に、弁論と詩の書き方を知られますように。

もう一度、お元気で⁷。

書簡23

（インゴルシュタット、1492年3月？）

あなたが何度も私に送ってくださる、実に優美に興味良く言葉と文章を綴られた手紙は、たいへんに私を喜ばせてくれます、このうえなく学識深き方よ。私はあなたの幸運をうらやましく思います。というのは、高い教養ゆえに、不運があなたにふさわしいとされることはなく、あなたが何かを夜を徹して作り上げるほどに、それを通して私たちは、あなたとあなたの祖国を思い、将来にわたって喜ぶでしょうから。本当に、私たちの人生がどのようなものであれ、私たちが生きていたことが後世の人々に伝えられるような何かを残そ

うとしなければ、ということは、高名な詩人の作品において、申し分なく書き表されています。「人それぞれに定まった日は動かさぬ。だが、事績により名声を推し広めること、これこそが武勇の仕事だ⁸。」それ以外のことのために、学識深い皇帝たちが、著作家たちを通じて自らの名声をさらに広く伝えたとは私は思いません。彼らによって死者たちは生き続け、いずれ死すべき者たちにとっても役立つと考えられたからです。ところで、ここで別のことをあなたに（お伝えします）。あなたは私たちの報酬について書いてくれました。（それに関して）少々申し上げます。私に対するあなたがたの怠慢、あるいはこの非常に厳しい冬をあなたがたと耐えた私の忍耐、このような現状に鑑みて、私が、多くの点で、学生たちと大学のお役に立てるのであれば、正規の講義と次の1年に対する100ライングルデンの給与を、あなたがたが拒否しないことを望みます⁹。さらに、正規外の講義について、私たちはこれまで親愛なるガブリエル殿¹⁰と討議してきました。あなたがたにお時間がある間に、お目にかかってお話しすれば、合意に至ることでしょう。それから、あなたにローマ王宛ての書簡¹¹を送ります。それを明日、印刷業者が私たちの小著の冒頭に載せるそうです。これをあなたの教養と学識で吟味してくださいませようお願いいたします。そうすれば、多くの人々の手に渡っても、加筆や削除すべきところに関するあなたの助言のおかげで、誰も私に文句を言えないでしょう。お元気で。

あなたのコンラート・ツェルティスより¹²。

[付記]本研究は、JSPS科研費JP18K00107の助成を受けたものである。

注釈

¹ 拙稿「ルネサンス期ドイツの知識人による書簡作成の理論と実践～コンラート・ツェルティス、ジクストゥス・トゥヒャー往復書簡より～」、『社会文化史学』64号、2021年、1～16頁。書簡の伝来状況については、4～5頁参照。

² Konrad Celtis, *Epitoma in vtramque Ciceronis rhetoricam cum arte memoratiua noua et modo epistolandi vtilissimo*, Ingolstadt, 1492. バイエレン国立図書館所蔵刊本のPDF版は、http://daten.digital-sammlungen.de/bsb00041707/image_1 (2021年12月12日最終閲覧)。この教本の内容については、拙稿「コンラート・ツェルティスの書簡作成術」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』56巻、2019年、291～302頁。

³ H・ボーツ／F・ヴァケ、池端次郎／田村滋男訳『学問の共和国』知泉書館、2015年。

⁴ 同上、7頁。この演説は、バイエルン公への頌詩とともに1492年にアウクスブルクで出版された。「学問の共和国」(respublica litteraria)という表現が用いられた箇所については、Joachim Gruber (hrsg. v.), *Conradi Celtis Protucii Panegyris ad duces Bavariae mit Einleitung, Übersetzung und Kommentar*, Wiesbaden, 2003, S.16.

⁵ Hans Rupprich (hrsg. v.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis*, München, 1934.

⁶ インゴルシュタット大学での「開講演説」を指す。

⁷ ルップリヒのトランスクリプションに基づき翻訳を行なった。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.20, S.35. ミュンヘン大学図書館所蔵の自筆書簡は、München, Universitätsbibliothek, 4° Cod. Ms.782 (Cim.27), Nr.1. PDF版は、<https://epub.uni-muenchen.de/11365/> (2021年12月12日最終閲覧)。この書簡のド

イツ語訳は、Gruber (hrsg. v.), *op.cit.*, S.145.

⁸ ウェルギリウスの『アエネーイス』第10歌467～469行を、一部省略して引用している。翻訳は以下に依拠した。ウェルギリウス、岡道夫／高橋宏幸訳『アエネーイス』京都大学学術出版会、2001年、471～472頁。

⁹ ツェルティスは、インゴルシュタット大学での講義開始に向けて「開講演説」を完成させるなど準備をすすめていたが、待遇に関しては要望通りにはならず、1492年5月に、40ないし42グルデンの給与で半年間の雇用と決まった。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.31, S.55. 彼が正教授に就任したのは1494年5月のことである。なお、トゥヒャーは1487年から同大学の正教授を務めており、ツェルティスは彼の学内における影響力に期待していたようである。

¹⁰ ガブリエル・バウムガルトナー (1449～1507)。ニュルンベルクの都市門閥出身、インゴルシュタット大学法学部正教授。H. Flachenecker, “Baumgartner (Paumgartner, Pawn-gartner), Gabriel”, in: Laetitia Boehm / Wilfried Müller / Wolfgang J. Smolka / Helmut Zedelmaier (hrsg. v.), *Biographisches Lexikon der Ludwig-Maximilians-Universität München, Teil 1, Ingolstadt-Landshut 1472-1826*, Berlin, 1998, S.34.

¹¹ 書簡作成の手引を含む教本の巻頭に掲載された、ローマ王マクシミリアン1世宛ての献辞を指す。

¹² ルップリヒのトランスクリプションに基づき翻訳を行なった。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.23, S.40f. ミュンヘン大学図書館所蔵の自筆書簡は、München, Universitätsbibliothek, 4^o Cod. Ms.782 (Cim.27), Nr.11. PDF版については、注7参照。この書簡の一部のドイツ語訳は、Gruber (hrsg. v.), *op. cit.*, S.143.